源頼朝と出雲国

20190914 松江市史講座

原　慶三

確認：出雲大社と杵築大社という二つの名称があるが、特別な場合を除いて出雲大社を使用する。また、閑院流で中世を通じて勢力を維持した三家について、実際の名称の定着は後のことであるが、便宜的に三条家、西園寺家、徳大寺家と表記する。その他の固有名詞でも同様の例がある。

はじめに

①「当寺の相承は開発領主沙弥寿妙嫡々相伝の次第也」「壽妙の末流高方の時、権威を借らんがため、**実政卿**を以て領家と号し」「実政の末流**願西**微力の間、国衙の乱妨を防がず、是故願西領家得分二百石を以て、寄進**高陽院内親王**」［系図⑤①（1)］

これは寄進地系庄園の典型とされた肥後国鹿子木庄条々事書の最初の部分である。これを紹介した法制史家中田薫は平安末期のものとし、冒頭の「当寺」をこの庄園が開発された「当時」と解釈したが、実際には裁判の当事者となった東寺が自らの権利は開発領主に由来することを主張したもので、その内容には事実とは異なる部分が少なからずあった。事書は裁判のため鎌倉末期に作成された中世文書であった（石井進「鹿子木庄条々事書をめぐって」、同『中世史を考えるー社会論・史料論・都市論』)。

②就中（なかんずく）資忠父忠光、讃岐（崇德）院宣と**号**し、**謀計**を巧らみ、社務を**押領**せしむ日、国造兼忠上洛を企て、奏聞をへせしむるの間、謀計隠れ無きに依り（略）其子孫永く停止せしむべき之由、宣下され了ぬ、資忠其子息として、**濫望**を成す之条、頗る其謂無き歟、

建久元年**六**月（一〇月と翻刻されてきたが誤りである）一八日に出雲大社正殿遷宮が行われた。仮殿遷宮後、飢饉や戦乱により正殿造営は進んでいなかった。それが文治二年（1186）五月に出雲大社神主が国造孝房から内蔵資忠に交代すると、四年足らずで造営・遷宮が完了している。

国造家とは出雲宿祢一族（以下では出雲氏）で祭祀を担当する家で、遷宮時には仮殿、正殿に御神体を抱懐する役割を果たしていた。其の一方で、出雲氏は勝部宿祢一族に次ぐ有力な国衙在庁官人でもあった。本殿造営が終わると、後白河院の支援を受けた国造孝房が神主に一時的に復帰し遷宮を行ったが、終了後、領家は神主を内蔵資忠に戻した。そのため国造は建久二年（1191）七月に、在庁官人等連署の解状を提出させて、自らを神主に補任することを求めたが、翌年七月、領家は資忠の地位を安堵し、併せて**頼朝袖判下文**と**前右大将家政所下文**も出された。下文が出されたのは資忠が幕府御家人であったからである。なお、解状では天永三年の遷宮を**永久二年**と誤り、その誤りが研究者にも継承されてきた。

③その身亦重代御家人之上、当職事右大将家御時、元暦・文治、宗孝・孝房父子共に御下文を賜うの条、**土肥次郎施行**明鏡也、その外**右大臣家御教書**‥‥

神主をめぐる争いは、敗北した出雲実政が領家から雑掌に補任されたことで、国造と領家の対立となった。国造は頼朝以来幕府の御家人であり、幕府から安堵されてきたことを

主張した。領家側は、頼朝の下文二通を証拠として、神主の補任権が領家にあるのは明白だと主張した。そこに引用された部分から、頼朝下文二通を復元することができ、頼朝が領家光隆の補任を安堵・追認していることが分かる。それは神主内蔵資忠が御家人であったからである。右大臣家御教書とは承元五年（1209）に比定できる二月一四日源実朝書状であるが、神主・氏人等を「家人」と呼んでいる。この時点の神主は中原孝高（父は有力在庁官人中原頼辰で、孝綱の父孝房の外戚親類＝母が国造家出身）であった（国造孝綱も大庭・田尻保地頭に補任されており、御家人であった)。

④**貞孝**得る所の文書は、**清孝**相伝之支証文也、（略）**孝景**自筆を以て、**文書目録状等**を清孝に出しながら、件文書、貞孝方に渡候ひ畢ぬ、

造営関係文書は「北島家文書」と「千家文書」に分かれているが、「千家文書」中の文書は大社政所文書であったものである。明治初年に政府が両国造体制を認めず、千家国造に一本化したため、政所文書が千家文書となった。現在の出雲大社文書はその後に両家から寄進されたもの。上記の文書目録等には造営旧記とともに「差図」が含まれていたが、これは北島家が所蔵しているはずで、千家所蔵の**『金輪御造営図』**は新たな情報を加えて後に作成されたものである。

承久の乱後に開始された本殿の造営は、神主の交替と、造営旧記が参照でないため遅れた。文暦二年（一二三五）に旧記を所持する国造義孝が神主に補任されてからも完成まで一二年を要している。

宝治の造営・遷宮に関する史料が豊富に残っているのに対して、建久の造営・遷宮に関係する史料は残されていない。建久の造営がスムーズに行われたのは、その中心となる神主と国衙目代に、頼朝の推薦する人物が起用されたからで、地頭として出雲国に入部した東国御家人も協力せざるを得なかった。東大寺再建に頼朝が協力したことは有名であるが、大社の建久の造営・遷宮は頼朝の協力でスムーズに進んだのである。

出雲大社領家藤原光隆と出雲国知行国主藤原朝方はなぜ頼朝の推薦を受け入れたのであろうか（『大社町史』では、幕府の介入を防ぐため、領家光隆が後白河院に出雲大社領を寄進したとされ、領家と頼朝は対立する関係とされたが誤りである)。文治元年一二月に頼朝は議奏公卿を推薦するとともに、義経に加担した公卿の解任と知行国主の交替を後白河院に求め実現している。そこでは頼朝が光隆を越中国知行国主に推薦しているが、**どのような背景があったのだろうか。**

頼朝は、父義朝や異母兄**義平・朝長**らが平治の乱で死亡したのに対し、助命されて伊豆国に配流された。同じく助命された同母弟**希義**は八才、異母弟で常盤御前の子である**全成、義円、義経**はそれぞれ七才、五才、一才であり、年齢不詳の**範頼**とともに乱には参加していないが、頼朝は一三才ですでに叙爵し、右兵衛権佐に補任され、合戦に参加していた。

頼朝の助命に関わった人物として**平忠盛の正室で頼盛の母である池禅尼**が名が語られているが、なぜ禅尼は行動したのであろうか。『平治物語』には頼朝を捕らえた頼盛（禅尼子）家臣から、頼朝が早世した長子家盛に似ていることを聞いた禅尼が頼朝と対面したことになっているが、家盛は父義朝と同じ世代で、乱の一〇年前に二〇代半ばで死亡している（正確な生年は不明)。

頼朝の助命の背景には母の実家**熱田神宮大宮司家**の働きかけがあったとの角田文衛氏説や、頼朝が仕えていた**上西門院**が働きかけたとの説があるが、平治の乱で大宮司家は義朝

を支援していない。また大宮司家にそのような影響力があったかはなはだ疑問である。**義朝の叙爵・下野守補任にも大宮司家の影響力が語られるが、根拠なき憶測である。**

☆『尊卑分脈』の大宮司家系図の記載内容には裏付けのない情報が含まれ、頼朝の母の兄範忠が院近臣として活躍するのは**平治の乱以後**である。

☆上横手雅敬「院政期の源氏」（御家人制研究会編『御家人制の研究』所収）では義朝の兄義平や朝長の実家と比べて大宮司家は特に勝ってはいないとする。

☆五味文彦氏「女院と女房・侍」（同『院政期社会の研究』）は、義朝が上西門院に近づいたのはもともとは母（**藤原忠清娘**）との関係によるもので、上横手氏の指摘するような院政主流派への接近ということからではなかった。主流への接近を考えるならば、院の寵姫美福門院に近づいた方が得策であったとする（忠清は鳥羽が春宮時代仕える）。

以上の疑問について検討した結果を今回お話ししたい。院政期の政治史については元木泰彦氏の研究があるが、氏の最新刊『源頼朝』（中公新書）には問題点が多々あると感じた。院分国・知行国制については、五味文彦氏の研究で飛躍的に進歩したが、その後は停滞している。「国司一覧」（『日本史要覧』）の共同作成者菊池紳一氏や院政期の政治・経済体制を論じた上島享氏の研究は形にとらわれすぎており、その分析は知行国のファジーな実態にマッチしていない。また若手の院政期研究者佐伯智広氏は、五味氏の研究成果を再検討せずそのまま利用している。

一、出雲大社本殿の高さについて

宝治の造営までは本殿は本来の正殿の規模での造営が行われた。頼朝が協力した建久の本殿も同様である。しかし、それ以降の本殿は規模を縮小した形での造営が続き、正殿とは呼ばれなかった。慶長の造営は正殿に准ずる形で、且つそれまでの掘立柱方式に変えて、礎石方式による造営が採用されたが、大社側ではその高さが**本来の規模**に及ばないとして、正殿の名称を使わず、寛文の造営では幕府の協力・援助を得て本来の正殿造営が復活した。

宝治の造営の本殿の高さについては一六丈（48 m）や 40 m前後であるとの説があるが、造営事業の実態に基づかない空論にすぎない。期間、費用、材料、技術が八丈より桁違いに必要であり、八丈か十六丈かとの選択肢などありえない。また寛文の正殿の高さ八丈（＝24 m）が何に基づき決定されたのかわからなくなってしまう。近年では高校日本史の副教材にも 48 mであったとの虚説が記されてしまっており、早急に訂正されなければならない。八丈である明証は存在する。宝治段階で仮殿式という用語は存在し得ないが、正殿式は当然存在したはずであり、これに基づき造営が行われてきた。

二、源為義－義朝の位置づけ

①為義の父母は誰か。

・通説では『尊卑分脈』（以下『尊卑』）に基づき、父は義家の子義親で、母は不明とされてきたが、藤原忠実と子頼長の日記（㉒～㉕）には義家の子と明記されている。父は義家、母は日野有綱の娘である（為義は足利氏の祖義国の同母弟であったが、それを義親の子から義忠（同母兄）暗殺後、義家の養子となったことに改変した）。系図は男系だけでなく女系の情報も分析しなければならない。ただし、時代が下るほど、系図から女性の記述は失われ、多くは男性の尻付として「母‥‥女」という形で情報のみが残る。著名な池禅尼もその母の名や生没年代は記されず、「頼盛の母」として

の情報のみである（ただし、近年、その没年代について有力な説が出された）。

②源義親の乱の再検討

・義家の嫡子は義国（新田・足利氏の祖）、為義の同母兄**義忠**であるが、暗殺された。

・義親の乱は平正盛により一日で平定されている。国家への反逆ではなく、大宰権帥時代に義親を摘発した大江匡房関係者を襲い、殺害したものである。当時の出雲守藤原家保は匡房の養子で、出雲国は匡房の知行国であった（備後守在任一年で匡房が遷任を要望し実現）。殺害された目代は匡房の権帥時代の目代の関係者であろう。

③仁平三年（1153）三月の義朝の叙爵、下野守補任を実現した背景は何か。

・同時に叙爵した熱田大宮司季範の子範忠は義弟義朝より一世代年上で、その昇進は遅い。

・臨時の除目として急遽行われ、それを取り仕切ったのは権中納言藤原清隆で、記録したはその娘婿の平範家（父実親は待賢門院判官代をへて公卿に）であった。臨時除目でもでも通常は参議一人以上が同席するが、この日は不参であった（㉕㉖）。

・叙爵の枠はすでに死亡し、鳥羽院とは無関係な聡子内親王（白河の同母姉、1131 没）と善子内親王（白河第二皇女、堀河の異母妹、伊勢斎宮退任後、藤原隆時＝清隆父宅を御所とした。1131 没）の合爵枠を利用している（系図①の 1）。

・義朝の母は、藤原忠清の娘であるが、為義と結婚した時点では父忠清は出家し、従兄弟である清隆の庇護下にあったと思われる。平治の乱の直前に頼朝の母は死亡しており、幼少であった頼朝の同母妹は祖母とともに清隆・光隆亭に身を寄せた。高倉天皇と小督の間に生まれた範子内親王は幼少時、光隆亭で育ち、斎院、准母・皇后（土御門）としての御所も光隆亭に隣接していたため、院号宣下の際には御所の所在地にちなんで「坊門院」と呼ばれた。（範子については「資憲以後」の年表と系図①の 2 参照）頼朝妹が「坊門姫」と呼ばれているのも同様であり、光隆亭で育ったのは確実である（系図⑦）。

・元木泰雄氏は義朝が国守となった下野国について、摂関家の知行国とは考えらず、前任の守として池禅尼の兄弟藤原宗長がいたことは同国が院周辺の知行国であることを物語るとした（『河内源氏』）が、**根拠なき憶測である**。下野守は日野資憲－藤原宗長－藤原宗国を経て義朝が補任されているが、前任の三人とも摂関家との関係を有している。宗長は待賢門院判官代を務める一方で、摂関家との関係を有しており、女院の死後はその傾向を強めていた。

・義朝の嫡子最有力の二人朝長（母は波多野氏娘、）と頼朝（母は大宮司娘）は父義朝の「朝」に藤原頼長の名前を組み合わせたものである。頼朝の昇進は公卿補任で確認できるが、平治の乱で死亡した朝長が当初クーデターが成功した際の除目で昇進したかは確認できない。久寿二年（1155）に近衛天皇が死亡するまでの状況は、鳥羽院の没後は崇徳院の院政が有力であり、頼長が兄忠通に対して優位に立っていた。それが後白河が後継天皇となり、頼長が内覧を認められなかったことで、状況は一変した。

三、藤原（日野）資憲はなぜ揖屋庄を崇徳天皇御願寺成勝寺に寄進できたのか。

附：内蔵資忠が行った頼朝への大功とは何か。因幡国高庭介資経は頼朝が伊豆国に配流される際に一族を派遣したことから、平家方であった子実経が所領を安堵された（1184 年、⑳）

①待賢門院の御願寺と庄園・分国（知行国）と近臣

・女御、中宮（1118）時代‥‥白河院近臣の配置（崇徳＝顕仁親王家も）
閑院流藤原（西園寺）通季、（徳大寺）実能（共に同母兄弟）［系図⑧］
勧修寺流**藤原顕隆（子顕頼）**、弟重隆［系図⑲］
頼宗流藤原宗通（子伊通・成通）［系図⑫］
顕季流藤原長実（子顕盛）・弟家保（子顕保、家成、娘婿花山院忠宗）・顕輔（子顕時）［系図⑥］
隆家流**藤原基隆**（子忠隆）☆忠隆の異母兄隆頼、同母弟経隆は出雲守［系図⑩］
高階為遠、宗章（高階氏は白河院時代は院近臣）［系図なし］
伊勢平氏平正盛（子忠盛、忠正）［系図⑬］
☆中宮権大進**藤原顕頼**と**藤原清隆**が運営の実質的中心
・院号宣下＝待賢門院（1124 ＝崇徳即位の翌年）
別当筆頭源能俊（鳥羽院庁の筆頭別当兼務、父俊明は白河近臣で鳥羽天皇外戚藤原公実の摂政補任要求に反対し、忠実が摂政となる）［系図⑮］
別当筆頭藤原（三条）実行（同母兄実隆と異母弟徳大寺通季の死によるか）
・白河院の没後（下線は早世）
別当‥‥源師時（『長秋記』）、顕頼、清隆に加えて、忠隆・隆教父子、顕盛（長実嫡子）、顕保（家保嫡子）、**持明院通基（因幡守）**らが中心となる。
判官代‥‥**日野資光**（系図⑤→別当）、藤原範隆（清隆同母弟）、**藤原親隆**（顕隆異母弟、出雲国知行国主朝方の叔父）、藤原宗長（池禅尼弟）等
・円勝寺‥‥六勝寺の一つ。京都洛東の白河の地に他の五ヶ寺と隣接して造営される。造営は白河院政期に行われ、院近臣の成功により完成し、供養が行われる。
☆**出雲国長海庄**（後に本庄と新庄に分かれる）
大治三年（1128）三月二八日落成供養（金堂、東塔、中塔、西塔）
大治四年五月一三日遠江国質侶庄が藤原永範（摂関家家司、系図③）により寄進・立券される。
・法金剛院‥‥京都北西部の仁和寺に隣接して造営される。院分国の設定。
御所（藤原基隆）、西御所（藤原憲方）、北斗堂（藤原顕能＝顕頼同母弟）、三重塔・経蔵（**持明院通基**）、南御堂（藤原親隆）、三昧堂（？、**保延五年一一月供養**）、ただし上屋のみで、土台整備費は女院分国が負担か。
保延三年（1137）九月、藤原実明が周防国玉祖社敷地と社領三箇所を寄進・立券
大治五年に供養が行われているが、まだ一部しか完成しておらず、保延五年に完成。同年には藤原周子が越前国河和田庄を法金剛院領に寄進。
・待賢門院領は二つの御願寺領と庁分御領からなる。→崇徳院領→上西門院領

②日野資憲とその時代
・1106　前大宰権帥**藤原季仲**が常陸国に配流。子懐季と実明も解官・配流。但し実明は翌年には許され復帰。子仲光は関東に土着か（孫が**毛呂季光**）。
・1110頃 資憲が日野実光とその叔父有定娘との間に生まれる。
・1118　平清盛が誕生。
・1119　異母（前出雲守高階重仲娘）弟資長（公卿となる）が生まれる。
顕仁（崇徳天皇）誕生。
・1120　白河院が熊野詣中に、鳥羽天皇が関白忠実の娘勲子（泰子）の入内を求める

が、激怒した白河により忠実は引退させられ、子忠通が関白となる。
・1123　鳥羽天皇が退位し、崇徳天皇が五才で即位。源義朝が為義と藤原忠清娘（**清隆従姉妹**）との間に生まれる。
この頃、平忠盛と妻宗子（池禅尼）の間に長子家盛誕生か。
・1127　資憲が**崇徳天皇の蔵人**として見任。この頃、待賢門院の異母兄実隆が、上野国の所領の国司免判を得るため、女房である姪を通じて鳥羽院に働きかけたが、上野守高階敦政は近臣藤原顕盛（長実子）を通じて白河院の了解を得て、庄園を停廃。
・1129　資憲が従五位下に叙爵。検非違使に見任。
・1130　春の除目で白河院が鳥羽院、待賢門院に相談せずに、いくつかの人事を決定しようとしたため、**女院が白河院に苦言を呈し**、人事案は撤回。
待賢門院の熊野詣に女院の侍石見（**女院分国**）守ト部兼仲、安芸守（前石見守）藤原資盛、**阿波（資光娘、資憲妻）**、土佐（高階為章娘）らが同行。判官代**宗長（池禅尼弟、和泉守）**は池田御所で帰還した女院を出迎える。
白河院が死亡し、鳥羽院政が始まる。
藤原忠実の使者が**鳥羽院**のもとに来た際に、資憲が**取次**を務める。
女院御願寺法金剛院御堂が落成供養。造進した播磨守藤原基隆は従三位公卿となる。源光隆が九才で元服するとともに叙爵し出雲守補任（女院分国）。
池禅尼の妹の子高階泰経が生まれる（～ 1201）
・1132　勘解由次官見任。**藤原忠通の家司**となり、法成寺御塔供養で、叔父宗光とともに行事を務め、その功で従五位上。叔父で**妻の父資光が五〇才で死亡**。
・1133　忠実の娘藤原泰子が女御として鳥羽院に入内。侍に**宗長**がみえる。
・1134　資憲が**皇后宮（藤原泰子）権大進**に補任される。
故藤原長実の娘得子が鳥羽院の寵愛を受ける。待賢門院別当源師時が長実の後家から、長実のその他の子達は解任、停任や所領・家地を没収されていることを聞き、日記『長秋記』に記す。
藤原宗長が和泉守（前任者は父宗兼）を重任。
・1135　資憲が正五位下に叙せられる。
・1136　池禅尼と宗長の弟**宗親が諸陵助**（正六位上相当）に補任される。
・1137　和泉守宗長が石見守兼仲と相博・遷任（ともに女院分国）。
・1138　法印信縁（父増覚は季仲弟）が死亡（五五才）。娘である左兵衛佐局は父の従姉妹の夫源行光（輔仁親王家臣）の養女となる。
・1139　皇后泰子が院号宣下で**高陽院**となる。この年に資憲が下野守補任ヵ。
躰仁親王が立太子し、**皇太子傳**［公卿補任］藤原頼長、東宮亮に清隆。
崇徳天皇の御願寺成勝寺供養。**顕頼**は供養行事賞で従二位、**清隆**は造成勝寺功で正四位上。
・1140　頼長辞任後の左大将補任を、正二位権大納言である源雅定（47）、三条実行（61）、徳大寺実能（45）が希望するが、**院が天皇に掛け合って雅定に決定。**
・1141　崇徳天皇が退位し、近衛天皇が即位。源義朝の長子義平が三浦義明娘との間に誕生。当時の義朝は「上総御曹司」と呼ばれるが無位無官。
一〇月に池禅尼、宗長、宗親の父宗兼が出家。
・1142　待賢門院が出家。資憲が**鳥羽院庁下文に別当として署判**（勘解由次官兼下野

守)。和泉守に日野光盛（資憲弟、忠実の家臣）が補任される。

・1143　**安芸守源光隆**が前斎院統子内親王の御所造営し、遷任功を認められる。
源義朝と波多野義通妹の間に朝長が誕生。
左兵衛佐局の養父源行宗（妻は藤原季仲娘）が出家・死亡（八〇）。左兵衛局佐は藤原教長の猶子となる。

・1144　資憲が**下野守を辞任。後任は藤原宗長が石見守から遷任か**。

・1145　法成寺上座法橋増仁が但馬国浅間寺を成勝寺に寄進。
安芸守（前出雲守）源光隆が死亡。待賢門院が死亡。出雲大社正殿遷宮。
大法師教智が信濃国広瀬御庄を、**藤原顕頼**が丹波国福貴御園を、**藤原家成**が山城国久世御園を、阿闍梨寛季が丹波国池上寺を成勝寺に寄進。
資憲が**揖屋庄**を成勝寺に寄進。
＜この頃、出雲大社領が資憲により崇徳院に寄進ヵ、出雲守は藤原経隆＞

・1146　石見国が忠通知行国（守源清忠）から高陽院分国（守源国保、父雅国は高陽院別当）へ

・1147　同母兄正五位上右衛門権佐**憲方**も希望した右少弁に、弟正五位下蔵人勘解由次官**光房**が五位職事労（忠通推薦）により補任される。
源頼朝が義朝と熱田神宮大宮司藤原季範娘との間に生まれる。

・1148　**高陽院**の白河殿渡御で、資憲が殿上御装束と御簾の行事を行う。

・1149　下野守に**藤原宗国（忠実職事、子経憲は頼長の子師長職事）**が補任される。
昇殿を認められた頼長の子師長が崇徳院を訪問した際に、資憲が**崇徳院判官代**として名簿の取次を行う。

・1150　頼長の養女多子が近衛天皇に入内したが、続いて忠通の養女呈子も入内したため、多子が皇后、呈子は中宮とされる。忠実が氏長者の座を忠通から奪い、頼長に与える。
資長が右少弁に補任された事で頼長が日記『台記』で兄資憲を越えたと記す。

・1151　兄信方が死亡したため異母弟経房が伊豆守に補任（知行国主は父**光房**）。
頼長侍として**散位宗長**がみえる。**高陽院の御願寺福勝院供養**。

・1152　美福門院の乳母夫藤原親忠の子親弘が相模守に補任。師長が四位に叙せられた拝賀で新院を訪問した際に、資憲が崇徳院**別当**として取次を行う。**宗長**が高陽院給により従五位上。頼長が石清水八幡宮に参詣した際の、前駈諸大夫中の院殿上人に**前下野守**宗長。法成寺執行増仁が**飯石社**を成勝寺に寄進。
呈子の懐妊が誤りであり、病弱な近衛天皇の後継者誕生は困難であることが認識される。仁和寺勝功徳院で高陽院の養女叡子内親王（美福門院娘）の仏事が行われ、摂関家領大田・大島庄に課せられた八具を**宗長**が調進。
忠通の長子覚忠が豊前国伝法寺庄を成勝寺に寄進・立券。

・1153　**源義朝が叙爵し、下野守補任**。資憲が**頼長の嫡子兼長**の家司に補任される。
六月に**前下野守宗長**が死亡。
前上野守敦政が権中納言家成が派遣した馬寮馬部により陵辱され、投身自殺。
忠通家司源季兼（対馬守）と源国保（石見守）が相博。
高階家行の子為清が任佐渡守功として法成寺西塔の造営を担当。
資憲の娘が平教盛との間に嫡子通盛を産む。

・1154　この頃に**頼朝の同母妹（坊門姫）**が生まれる。

頼長子兼長が春日祭上卿として南都へ行くが、前駈の中に**高陽院殿上人**として高階家行子為清がみえる。
権右中弁中宮（呈子）亮藤原光房が死亡（四六才）。経房は一三才だが、翌年二月に伊豆守を延任し、1158 年末に安房守に遷任（一七才）。
高陽院福勝院内三重塔供養。

・1155　近衛天皇が死亡。源雅定と三条公教が鳥羽院・忠通と連絡しつつ、雅仁親王の即位を決定。後白河天皇の内侍に阿波（崇徳女房、資憲の妻）と前斎院（統子内親王）女房小備中（故源光隆妻、**高階家行**娘）が忠通により指名される。
徳大寺公能娘忻子が女御として後白河に入内。家司には**高階家行**等を補任。
この頃、筑前国（一部豊前国にまたがる）粥田庄が**成勝寺**に寄進される。**大宰権帥は清隆から娘婿忠基、筑前守は清隆の子清成から頼季。**
高陽院が崩御。福勝院内に埋葬される。

・1156　**資憲と子俊光（母後白河内侍阿波）**と資光の子盛業（母故待賢門院女房関屋）が後白河天皇の蔵人に補任される。鳥羽院死亡（五四才）。
保元の乱で崇徳院が配流となり、頼長は敗死。崇徳関係で唯一参加した藤原教長は降伏・出家し常陸国に配流（1162 に許され帰京）。

・1158　頼朝が皇后宮（統子内親王が弟後白河准母として立后）権少進（正六位下）。権大夫徳大寺実定、亮藤原憲方、権亮藤原信頼（忠隆子、母、妻は藤顕頼娘）、大進平親範（母は光隆姉妹）、権大進藤原経房（憲方甥、妻は親範姉妹）。

・1159　頼朝（左兵衛尉）が上西門院蔵人、次いで二条天皇蔵人に補任される。
頼朝の異母兄朝長が中宮（美福門院娘姝子内親王）少進（従五位下）。
頼朝の母が死亡。
平治の乱で義朝は敗死し、頼朝は配流（一時は従五位下右兵衛佐となるが解官）となる。→坊門姫は祖母（忠清娘）とともに藤原清隆のもと（坊門亭）で生活。光隆は乱への関与により、藤原成親、源師仲等とともに解官。

・1160　光隆は治部卿に還任し、従三位に叙せられ、公卿となる。後白河院の娘式子内親王（母は藤原季成娘で、以仁王の同母姉）の初斎院に併せて、出雲大社領が斎院に寄進されるヵ（領家藤原光隆、神主は国造兼忠）。
美福門院得子が死亡（四四才）。

・1162　藤原清隆が死亡（七二才）
一一月一七日に平頼盛が母池禅尼の病が危急だとして、賀茂臨時祭の使者を辞退した。代理を打診された異母兄教盛は、禅尼は継母であり、父忠盛没後、禅尼の関係での服喪が無いことを確認してから回答するとした。

・1164　崇徳院が配流先の讃岐国で死亡（四五才）。朝廷による儀式はなく、左兵衛佐局等の関係者は帰京を許される。

・1165　**藤原光能**（定家の従兄弟、後に朝廷と頼朝をつなぐ）が、藤原懐遠（その姉妹が日野資光の妻待賢門院関屋）から譲られ、下野守となる。

・1166　光隆が参議となり、翌年には権中納言に補任されるが五ヶ月足らずで辞任。この間、備後、美作で子雅隆を国守として知行国主。

③資憲没後の状況

・1168　**故勘解由次官資憲**の子非蔵人学生藤原**基光**が即位した高倉天皇の昇殿を認められ、蔵人に補任される。異母兄**俊光**が正五位下に叙せられる。

・1169　院蔵人藤原**親光**（資憲子、基光舎弟）が天皇の蔵人に補任される。
・1172　**揖屋社領家**某が大宅助（資）澄を父助（資）安の譲状に任せて安堵。
・1174　出雲守**藤原朝定**が石見守に遷任し、後白河院寵臣**藤原能盛**が出雲守補任。
・1177　藤原能盛が周防守に遷任し、藤原朝定が出雲守に復帰。**鹿ヶ谷の陰謀**。
　大火、強訴、政変が続く中、**藤原教長**入道が讃岐院・頼長の除霊を説き、蔵人頭**藤原光能**が協力。讃岐院を改め**崇徳院**とする。
・1178　**範子内親王**（父高倉天皇、母藤原成範娘小督、光隆亭で育つ）が二才で賀茂斎院となり、光隆の子雅隆が勅別当となる。
・1179　蔵人藤原親光が対馬守に補任。
・1180　以仁王の乱。親光は後白河院の意向を受けて混乱する畿内から対馬国に下向し、税を徴収し、物資の確保を図る。
　頼朝が挙兵し、一旦敗北するが、房総半島で体制を整え鎌倉に入る。年末に頼朝の新造御亭が完成し頼朝が入るが、**毛呂冠者季光**も祗候。
・1181　範子内親王が父高倉院の死により斎院を退下し、前斎院となる。
　出雲守藤原朝定（父朝方が知行国主）が大社修造のため重任宣旨を得る。
・1182　北条政子が頼朝の寵愛する亀前が伏見冠者広綱の家にいることを、時政後室牧方から聞き、牧方の兄宗親に命じて破却させ、恥辱を与える。これを聞いた頼朝は宗親の髪を切り報復する。
・1183　親光が上洛しようとしたが、都落ちした平家のために通路を塞がれ、在国していた。正三位参議藤原光能が出家して死亡（五一才）
　源義仲のクーデター、翌年正月に義仲敗死。
・1184　一の谷合戦で平家が敗北。伯耆国武士は合戦の直前に反平家方紀海六が後白河院の宮を支援して伯耆西半分を支配したため帰国し、これを鎮圧か。この結果、平家方の小鴨氏は一の谷合戦の影響を免れ、紀海六は勢力が低下。
　因幡国長田兵衛尉実経は平家家人であったが、**父資経**の頼朝への大功により所領を安堵される。
　崇徳院の除霊のため後白河院により粟田宮社が設けられる。
　対馬守日野親光に対して屋島に参陣せよとの命令が平家から出されるが、これを拒否したため合戦となる。
　頼朝が藤原成親の弟隆頼（盛頼）に平家没官領肥前国晴気保地頭職を与える。
　五辻前斎院頒子内親王が出家し、邸宅等を**範子内親王**に譲る。
・1185　中原清業（平頼盛と関係）が対馬守に補任される。頼朝が**御外戚**である対馬守藤原親光が帰還できるように、迎えることを家臣に命じた。平家から逃れるため高麗国に渡っていた親光は、平家の滅亡により上洛し、鎌倉に迎えられる。
　頼朝が没官領備中国妹尾郷を**崇徳法華堂の経堂**に寄進。前年に備前国福岡庄を寄進したが問題があり牢籠したため、讃岐まで崇徳院に従った尼（**左兵衛佐局**）に進めた。尼は崇徳の子重仁の母で、**頼朝の親類**と記されている。
・1186　幕府からの訴えを受けた朝廷は親光を対馬守に還任。頼朝の知行国である豊後守に頼朝が藤原（毛呂）季光を補任するよう求める。
　下総・信濃・越後国の幕府関係の所領で税未進の所領が中心されるが、越後国宇（鵜）河庄は**前斎院御領で預所が前治部卿藤原光隆**と記されている。
　藤原光能の後室比丘尼阿光（足立遠元娘、領家）の訴えにより、頼朝が丹波国栗村庄への武士の狼藉を停止し、領家に従い、崇徳院領として年貢を備進するよう命令。
　幕府が領家藤原光隆に働きかけ、国造孝房に代えて頼朝に大功のある内蔵資忠（父忠光は崇徳院領時の神主）が神主に補任される。
　元平家の家人であった平康頼（知行国主藤原成親の目代から平頼盛の家臣へ）が尾張国野間庄にある頼朝の父義朝の墓に水田を寄進したことに対して、阿波国麻殖保の保司に補任される。
・1188　外甥（頼朝の母の舎弟祐範の子）仁憲が頼朝のもとを訪れ対面。祐憲は姉である頼朝の母の菩提を弔い、頼朝が伊豆に配流された際には郎従を派遣し、毎月使者を遣わしていた。仁憲の関係者で園山庄前司師兼が、頼朝に下司職還補の領家吉田経房宛の書状発給を求め、実現（補任の有無は不明、『鏡』では1186年の記事とするが矛盾あり）。
・1190　出雲大社の正殿造営が完了し、遷宮が行われる。
・1191　出雲国在庁官人等が内蔵資忠に代えて国造孝綱を神主に補任するよう解状を出す。その際に過去の造営文書が写されるが、国造が関与していない建久の遷宮関係史料は除外される。
・1193　**領家光隆は資忠を神主に補任し、頼朝がこれを安堵する下文を与える。**
　頼朝が御外舅憲実法眼（頼朝母の父季範弟）の子玄蕃助大夫仲経に美濃国土岐多良庄を与える。
　毛呂季綱（季光子）が頼朝配流時に付近に牢籠する頼朝家臣を扶持し送り届けたとして、頼朝が武蔵国泉勝田を与える。
・1195　範子内親王が准三后となる。**藤原季光**が**頼朝の門葉**であることを理由に、中条家長の行為を無礼として咎め、喧嘩となる。
・1198　**範子内親王**が後鳥羽院の子土御門天皇の准母とされ、**皇后宮**となる。
・1199　揖屋庄領家**藤原範季**（資憲娘と平教盛との間に産まれた娘を妻とする）が政所下文により、子大宅資澄の譲状に任せて、宗澄を揖屋社別火并上官に補任。
・1200　頼朝が落馬が原因となり死亡（五四才）。
・1201　出雲大社領の領家藤原光隆が死亡（七五才）。
・1206　範子皇后が院号宣下により**坊門院**となる。
・1208　前五辻斎院頒子内親王が死亡。
　出雲大社神主国造孝綱が大庭・田尻保地頭に。権検校内蔵孝元が出雲国内数カ所の地頭に補任されるが、対立が生じ国司や幕府も介入。
・1210　坊門院が死亡。土御門天皇が退位し、**出雲大社領は土御門院庁領となる。**
・1211?　**将軍源実朝**が、出雲大社神主・氏人等に家人であるので、訴訟の際には連絡することを伝える。
・1214　土御門院庁下文により、神主孝高の濫妨を停止し、国造孝綱を神主に補任せよとの命令が出される。
・1220　出雲大社の新たな造営が求められ、大社政所が過去の遷宮状況を報告。
・1221　承久の乱。知行国主源有雅は処刑。出雲大社本家土御門院は関与せず。中原氏、出雲氏等の有力在庁官人が没落し、大社神主も交替。
　土御門院は自ら土佐へ配流され、出雲大社領はその母承明門院領となる。
　持明院家行が出雲国知行国主となり、国守に守護佐々木義清を起用。

関係文献（実際に参照したもの）
［院政期、鎌倉幕府関係（順不同）］
飯田悠紀子「知行国主・国司一覧」（『中世史ハンドブック』）
角田文衛「崇徳院兵衛佐」（同『王朝の明暗』）
「池禅尼」（同『王朝の明暗』）
「源為義の母」（同『王朝の明暗』）
「源頼朝の母」（同『王朝の明暗』）
「源頼朝の妹」（同『王朝の明暗』）
「小督局と坊門院」（同『王朝の明暗』）
『待賢門院璋子の生涯　椒庭秘抄』
服部英雄「鹿ヶ谷事件と源頼朝」（同『歴史を読み解く　さまざまな史料と視角』）
五味文彦『院政期社会の研究』（第二部第一章院政期知行国の変遷と分布）
『院政期社会の研究』（第二部第二章大庭御厨と「義朝濫行」の背景」）
『院政期社会の研究』（第四部第一章女院と女房・侍）
『院政期社会の研究』（第四部第三章院政期政治史断章）
『院政期社会の研究』（第四部第四章花押に見る院政期諸階層）
『平清盛』（人物叢書）
菊池紳一・宮崎康允「国司一覧」（『日本史総覧』Ⅱ）
菊池紳一「後白河院政期における知行国についての一考察」（一）～（三）太平臺史窓,2|5|6,
石井進「『鹿子木庄事書』の成立をめぐって」（同『中世史を考える』）
「源平争乱期の八条院領　「八条院庁文書」を中心に」（『日本中世研究の軌跡』）
「源平争乱期の八条院周辺　「八条院庁文書」を手がかりに」（『中世の人と政治』）
上横手雅敬「院政期の源氏」（『御家人制の研究』）
元木泰雄『藤原忠実』（人物叢書）、
『源頼朝』（中公新書）、
『河内源氏　頼朝を生んだ武士本流』（中公新書）、
『保元・平治の乱を読みなおす』（NHK ブックス）
『後白河院と平清盛』（NHK ブックス）
元木泰雄編『保元・平治の乱と平氏の栄華』（京・鎌倉の時代編第一巻）
野口実編『治承～文治の内乱と鎌倉幕府の成立』（京・鎌倉の時代編第二巻）
野口実「流人の周辺」（『日本中世の諸相』上巻、同『中世東国武士団の研究』）
「北条時政の上洛」（京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要第 25）
樋口健太郎「「保安元年の政変」と鳥羽天皇の後宮」（同『中世王権の形成と摂関家』）
多賀宗隼『源頼政』（人物叢書）
川端新『荘園制成立史の研究』
上島享『日本中世社会の形成と王権』（第一部第四章大規模造営の時代）
『日本中世社会の形成と王権』（第三部第一章経費調達制度の形成と展開）
『日本中世社会の形成と王権』（第三部第二章造営経費の調達）
『日本中世社会の形成と王権』（第三部第三章庄園制と知行国制）
佐々木紀一「北酒出本『源氏系図』の史料的価値について」（山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告 27）
「池禅尼の没年」（山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告 34）

「源義忠の暗殺と源義光」（山形県立米沢短期大学紀要 45）
「源為義義親実子説の成立時期について」（山形県立米沢短期大学紀要 49）
佐伯智広『』（第二部第一章鳥羽院政期王家と皇位継承）
（第二部第二章二条親政の成立）
松島周一「対馬守藤原親光の立場」（愛知教育大学研究報告 51　人文・社会科学編）
保立道久『中世の国土高権と天皇・武家』第四章「院政期東国と流人・源頼朝の位置」
河内祥輔『保元の乱・平治の乱』
佐伯徳哉「平安末期藤原摂関家の石見知行国支配と対馬海域」（『石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』）
古沢恒平「豊後大友氏の出自とその親交圏」（大分県地方史 206）
米谷豊之祐『院政期軍事・警察拾遺』
古沢義人「平治の乱における源義朝の謀反の動機形成-勲功賞と官爵問題を中心に-」『経済志林』八〇巻三号
「平治の乱における藤原信頼の謀叛」『経済志林』八〇巻四号
『中世初期の〈謀叛〉と平治の乱』
［出雲大社関係］
大社町史（通史編、資料編）
松江市史（通史編 2 中世、古代中世史料編）
井上寛司『日本中世国家と諸国一宮制』
「中世出雲国一宮杵築大社と荘園制支配」（日本史研究 214）
「文献史料から見た宝治２年の杵築大社造営」（『出雲大社境内遺跡』）
佐伯徳哉『中世出雲と国家的支配』
『出雲の中世』
松薗斉「中世神社の記録について－「日記の家」の視点から－」（史淵 127）
「出雲国造家の記録譲状作成の歴史歴背景」（『古代中世史論集』）
松岡高弘・土田充義氏「出雲大社における仮殿造について」（『建論報』385）
浅川滋男、島根県古代文化センター編『出雲大社の建築考古学』
山岸常人「中世杵築大社本殿造営の実体と背景」（『仏教芸術』278）

［補足　北島家譜による国造在任期間と遷宮］
国造国経（1047 ～ 1072）1062 仮殿遷宮
国造頼兼（1072 ～ 1099）1067 正殿遷宮
国造宗房（1099 ～ 1099）
国造兼宗（1099 ～ 1131）1109 仮殿遷宮、1112 正殿遷宮（1114 修理）
国造兼忠（1131 ～ 1168）1145 正殿遷宮
国造兼経（1168 ～ 1176）
国造宗孝（1176 ～ 1185）1179 仮殿遷宮
国造孝房（1185 ～ 1204）1190 正殿遷宮
国造孝綱（1204 ～ 1225）
国造政孝（1225 ～ 1231）1225 仮殿遷宮
国造義孝（1231 ～ 1280）1248 正殿遷宮
国造泰孝（1280 ～ 1308）